

人との関わり



札幌市医師会
北ノ沢病院

杉山 唯芳子

精神科の病棟ではみなさん「心を病んだ」状態になり、入院されます。入院後、気持ちが安定し、この方が精神疾患だったのだろうかと感じるほどよくなって、笑顔で退院されていく方もいますが、いつの間にかデイケアにも病院にも来なくなり、その後、緊急入院のような形で再会するケースに少なからず遭遇することがあります。

せっかく退院しても家族との折り合いが悪くなく、また、経済的にも家族から搾取されるような場合、本人に自立の方向を提示しても「家族が同居を望んでいる、夫が別居させてくれない」など退院することがご本人をストレスの只中に放り出すことになってしまうような場合もあり、ジレンマを感じます。

規則正しい生活や、本人の自立したいという意思とは違うところ、社会が密にかかえる「冷たさ」や、家族のこうあってほしいという無言の負荷が疾病を再燃させる場合もあるように思います。

自分はこの治療に関して、どの程度この『人』本人に関わって良いだろうか… ということは、学生の頃に教わるわけでもないし、「病気だけではなく『病人』をみよ」ということはいわれても、医師の共通の認識は無いようです。昔は「患部をとったら後は本人の生きる力の問題」とされていたようなことも、現在では産業医がその復職まで意見、指導するべきとなっています。

医師に求められる『治療』は単に、病気にさせない、早期にみつける、治癒させる、にとどまらず、治癒した後の人生にまで関わってきています。「病者の人生に関わる事柄」をはたしてどこまで？という疑問が、影のようについてまわります。

知らぬ間にいつも目に入っていた医の倫理綱領の言葉が重く響きます。『医師は責任の重大性を認識し、人類愛を基にすべての人に奉仕するものである。』

新型コロナウイルス感染症で亡くなった方とは別に、おそらくは新型コロナウイルス関連での自殺の報道も目にします。個々の事情は分かりませんが、個人と社会の関わりというものが、私たち個人個人が「生きていく」ということに思いのほか大きな影響を与えていることに、改めて気づかされます。

精神疾患を患っていないなくても、家族や会社、ご近所さんとのジレンマは深刻か否かは別として、どこ

にでもあるものですが、みなさん普通はなんとかやっていけるものだし、それが「生きる」ことの本質に影を落とすなんて考えもしないでしょう。

しかし、今回のこの新型コロナウイルス感染症の流行下では、ほんのちょっとした楽しみ、気兼ねなく新しいお店に出かけたり、日常の買い物、衣服の試着、デパートの物産展、たまに行くスーパー銭湯やスポーツジム、カラオケ、散髪などで、軒並み他人に対して物理的距離をとる注意深さが必要とされます。普通に話していた知人とも「この人、カラオケ好きだったよな」という考えが頭をよぎると距離を測ってしまう自分がいたり、自分の子供も通学バスや学校で知らずに感染している可能性があるかと思うと、食事の時間をずらしたり居間で一緒にくつろぐのにも距離を置いてしまっています。

勤務先の病院に自分がウイルスを持ち込むリスクは下げなくてはいけないと考えると、こうした日常の全てに細々とした制約がかかってきて、ポディブローのようにじわじわと心が疲弊してゆくのを感じます。

急いで作っているワクチンの安全性への不安もストレスですが、よく寝て、運動し、しっかり食べる。これ以外に対抗する手段はないのです。しかし、こういった様々なストレスのせいで、それを知っているのに、つい映画を見たり携帯でゲームをしたりして、夜更かししてしまっている現実があります。

最近話題になる煽り運転やカスタマーハラスメントのように、ちょっとしたことで以前なら考えられないような怒りの行動に出てしまった人々のニュースを聞くと、孤立が人間に大きなストレスを与えている、すなわち「人間は孤立しては生き難い生物なのだ」とつくづく思います。

集団でいることで捕食者から身を守り「人間」になってきた、すなわち、集団から切り離されてもなんとも思わなかった人たちの遺伝子は、きっと進化の過程で淘汰されていったのだろう…そんなことを考えていると、またいつの間にか深夜を過ぎ、しびれてきた脳裏に少し苦い後悔とやるせない思いを抱えたまま、日々が過ぎていきます。

新年が良い年でありますよう。